目次

はじめに …… 2
ちょりさんと出会う …… 4
妄想の仕組み …… 14
谷中の庵 …… 21
木はっちへいらっしゃい …… 29
真剣な話し合いの風景 …… 37
あそびと暇人愛 …… 40
ミックス！ …… 47
鉛筆で描くぬか漬け …… 54
おわりに …… 58

はじめに

この冊子は、谷中でおこなわれた《ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト》（以下《ぐるヤミ》）の実態を調査すべく送り込まれた中島裕美さんが、ぐるヤミと出会い、〝ぐるぐる〟に巻き込まれ客観性を失いつつも、どうにか事実を記録しようと努めた手記です。

《ぐるヤミ》がつくり出していたのは、何かが始まりつつあるような妙な空気感であり、それを支えているのは精神的な領域といっても過言ではないものなので、プロジェクトの実態を言葉にするのは非常に困難なことです。しかし中島さんは、認識の限界を痛感しながらも自らの実体験を語ることで、心が動いてどうにも抱えきれずに溢れ出てしまった私たちの日々

の活動の痕跡を、《ぐるヤミ》体験者が見た風景の一例として見事に記録してくれました。出会った時、中島さんは表現者を志す学生でした。自分の将来のことが一番気になっている時期にも関わらず、《ぐるヤミ》を大切に見つめ、向かい合い続けてくれたことに心から感謝しています。

タイトルに「観察」という言葉がついていますが、実際は観察者である中島裕美による主観的ないわば「〝妄想〟観察日記」と言えるかもしれません。誰が見た風景が事実に近いのかわかりませんが、極端な思い込みが想起させる風景のほうが、価値があると私は信じています。勝手な解釈や思い込みが引き起こす摩訶不思議な出来事を笑って味わえるようなひと時が、この日記を通じてあなたの日常にも訪れますように。

「ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト」プロジェクトディレクター
富塚絵美

ちょりさんと出会う

二〇一二年一〇月一四日（日）曇り時々雨
〜新宿・喫茶店にて〜

「ある人から君にメールが届くから、その人と〝何か〟やってみてほしい」――紹介者であるM氏から与えられた唯一の役目がそれだった。

ひょんなことから私は、東京アートポイント計画のプロジェクトに関わる機会をもらった。何にも分からない状態で。

「あっはい、分かりました」

M氏の簡潔すぎる誘いに劣らず即答してはみたものの、言ってから、いったい〝何か〟って何なのだろうと首を捻る。

そのメールの相手が富塚絵美という人であること、その人のやっているプロジェクトの名を《ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト》と呼ぶこと。その二点を伝え、M氏は「じゃあよろしく」と話を切り上げるのだった。……え、ちょっと待ってください。

あんまり情報が少ないので、慌ててM氏に食い下がって聞き出してみると……。

「〝若い人たちが集まって〟やっていて、〝いろんなこと〟をして偶然生まれる〝幸せ〟みたいなのを『何かいいなぁ』と思う活動だよ」

こんなに謎の現場ってあるだろうか？　どんな人なのか、どんな活動をしている人なのか、そして〝何か〟をするというのはどういうことなのか、何も分からない。誰もが一度は思うこと――《ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト》って変わった名前だなあ。そんな素朴な感想と不安と不思議な好奇心を抱いたのが、つい一週間ほど前のことだった。

M氏に言われた通り富塚さんからメールがきて、私たちは新宿で会う運びとなった。

「あっはっは、ごめんねー」

その当日、定時に電話をするとスピーカーの向こうから明るい声が飛んできた。それが富塚さんとの初めての会話だった。前の用が押しているので先に店へ入るよう、店名を教えられる。私は「初めまして」と言うのすら忘れてその声に聞き入った。初めて会った気がまったくしなかったからである。いや、会ってすらおらずまだ声だけの存在なのに、私のなかに既に富塚さんは立体の人物となっていた。それくらい、彼女の態度は自然で人懐こかったのだ。

新宿三丁目のとある喫茶店で富塚さんを待つ。こぢんまりとした外観と、覗いた窓から漏れ出る飴色をした雰囲気に、ふとさっき初めて耳にした富塚さんの声で「さあ入って、入って」

と空耳を得るのであった。

アンティークな調度品がゆったりと置かれ、絵画や可愛い小物が飾られる。ジャズが流れ、水出しコーヒーが静かに雫を集めていた。本棚にはずらりとマンガ、そして写真集。スタンドライトに革張りのソファ、私はきょろきょろと店内を見回した。すると足元から猫が飛び出してきて、店内を悠々と歩いていくのだった。

『つげ義春作品集』を読みながら小一時間ほど一人でいたのだが、そのうちに店の人はバナナやらお菓子やらいろいろ出してくれた。通りから少し入らないと気付かないような小さな店で、多くの人はここを見逃してしまうかもしれない。でも富塚さんはそこを知っていて、しかも私に教えてくれた。会ったこともない私に、会わずしてこんなサプライズを用意してくれていたのである。いったい何者なのだ、富塚さんという人は……。

会ってすぐ、私は彼女のことを〝ちょりさん〟と呼ぶことにした。まったく自然な流れだった。もともとメールに「ちょり」と署名してあったのだが、会った瞬間に〝富塚さん〟と呼ぶ方が却ってふさわしくない距離に感じたのだ。最初に電話をしたときに感じた印象――ちょりさんという人の、人との距離を感じさせない不思議なオーラ――は間違っていなかった。

とりあえずプロジェクトについて教えてほしいとちょりさんに頼んだとき、彼女は「何かワカラナイけど楽しいもの」と答えた。

何かワカラナイケド？　彼女に聞けば活動内容を教えてくれて、それをインタビューして仕事は終わりかと思っていたのだが……。そんな考えはそもそも間違いだったとすぐに気付く。ちょりさんは〝ワカラナイ〟を強調した、というより、その言葉をとても楽しそうに言ったのだ。何だかワカラナイもの、それこそが大事なのだと。

ちょりさんは言う。

「こういうものって、原動力が何なのかワカラナくても動けちゃうんだ。何かコンセプトがあって始めたわけではない、ちょりが見たいやりたいということをやるだけ。するとなぜか人が集まってくる……そこに〝何か〟があるんだろうね」

〝何か〟って何だ？〝ワカラナイ〟の正体って？　聞けば聞くほど、ちょりさんと出会う前より混乱してきた。でも確かに言えるのは、そこに人が集まって、大人もこどもも笑っているという事実があることだ。

《ぐるヤミ》の活動拠点は根津にあるらしい。そこに集まる人々は、地元の人や芸大生が多いのだとか。そういうワケノワカラナイ場に地元の人がいるというだけで、すごいことではないだろうか。学生はそういう情報に敏感だが、地元の人はまったく《ぐるヤミ》を知らないところからのスタートなのだ。自分たちの土地に知らない人たちが来て、よくワカラナイことをし

ている。訝しがられて当然と言ってしまえばそこで終わりだが、今、彼女らは幼稚園でこどもたちと活動をしたり、地元のお祭りに呼ばれたりもするという。何かが起こっているんだ。しかも、内側だけでなく、外側にまで伝染して広がる何かが。

ところで、具体的に《ぐるヤミ》はどんな活動をしているのか。谷中という町でいったい何が繰り広げられているというのだろう。ちょりさんの答えは、

「そこで各々が好きなこと、得意なことをやる」

……それだけ？

「いつもみんなで、ごちゃごちゃ、ときにゆるゆる、気が付くとばたばたしてる。これをやるって決めて何かやるわけではなくて、ちょりの『これやってみたいんだけど』に、みんなが自分たちの好きな方法で乗っかってくれる感じかな」

ちょりさんは人に向いていないことを押しつけたりはしない。やりたくないことをやっても楽しくないからだ。だからまずは、とにかく日常のなかで好きなことを各自やる。いや「まず」どころか、これがむしろ本体なのではないかという勢いで。それが日常なのかプロジェクトの一部なのかは誰にもワカラナイ。ただとにかく、みんな〝ゆるゆる〟と日常を楽しむ。

「無駄は大切。だから一見無駄に思われるような日常をじっくり過ごして、人数も無駄に多く、ごたごたと無駄に動く。すると、それまでに見えてこなかった、新たな才能や可能性が見え隠れするから」

それを発見したちょりさんのなかで、何かがむくむくと出てくる。この人たちでこんなことをやったら面白いんじゃないのか、と。そうやって生まれた「これやってみたいんだけど」を、今度はこれまたメンバー各自がそれぞれに解釈してできることをやる。ここが重要で、ちょりさんの〝思惑〟というやつは、ちょりさんにとっては大事だけれど、他の人は全く知らなくてよいことなのだ。〝アート〟と聞くと自分の世界をつくって「さあみなさん見てください、これが〝私〟です」というのを思い浮かべがちだが、彼女が大事にしているのはその〝アート〟が乗る舞台をつくることであって、演じる人、表現する人はちょりさんの企画に参加する他のみんななのだ。だから、メンバーは自分の〝思惑〟で動く。自分の表現をする。

「自分のもつ世界を表現したいんじゃなくて、とにかく、人との関わりのなかで何かをつくり続けていたい」

彼女のいう舞台とは、どうやら発表の場という意味らしい。イベント（なのかパーティなのか？）をつくって、普段〝表現〟をする機会のない人たちの〝晴れの舞台〟をつくる——ちょりさんはそう何気なく言ったが、それってすごいことだ。表現するという行為は、一見簡単そうに見えて、実現するには大変なエネルギーが要る。その舞台を人のためにつくるということがいかにすごいことか、表現者の端くれである私は彼女をまじまじと見つめるばかりだ。

ちなみに、何ができあがるのかといえば、それがまたワカラナイ。言い換えるなら、ワカラナイものができあがる、といったところだろうか。私はまだこの部分に関して理解不足で、外

から遊びに来てくれた人たちが〝観客〟なのか〝参加者〟なのか、はたまた〝表現者〟になり得るのかよく分からない。完成したものに関しては、近いうちにこの目で確認したいと思う。

ここまで話を聞いていると、これはちょりさんの作品なのだろうかという気がしてくる。しかし、ちょりさんが《ぐるヤミ》をつくっているのではないということも話のなかで明らかになった。〝ぐるぐる〟しているちょりさんがいて、それに反応して〝ぐるぐる〟しはじめる人たちが出てくる（その人たちは〝ヤ→ミ→〟と呼ばれる）。人数が増えると、次第にその全体の空気感が遠心力を高め、さらなる他者を巻き込んでいく。仕掛けているのは明らかにちょりさんなのだが、勘違いや偶然、予想外の展開も複雑に混ざったものだから、言わば共同エネルギーだ。これこそが《ぐるヤミ》の本体である。でも一つ確かに言えるのは〝原動力＝ちょりさん〟ということだろう。

ちょりさんの思惑の一つ、それは、「自分の予測できないくらい面白いことになればいいな」というものだ。

みんながちょりさんの言いなりに動くのではなく、それぞれの方法で彼女に反応する形で好きなことをやってくれれば、予想外が少しずつ起こる。それを見てちょりさんが面白いと思う。そして新しい何かを発見したり思いつく。それをさらに、見に来た人や参加メンバーたち（ヤ→ミ→）が面白いと思って行動を起こす。ちょりさんは、きっかけをつくる原動力であり、加

速装置である。そのちょりさんを通過したものが自ら〝ぐるぐる〟を生みだし、無限の循環をつくっていくのだ。

そういえば、事前にM氏に言われていたことがもう一つあった。

「もしちょりに会ってみてうまくいかなそうだったら、その場でサヨナラしても構わないよ」

この言葉の意味が今になってよく分かった。《ぐるヤミ》に関わる上でただ一つ必要な条件は〝楽しむ〟ことができるかどうかなのだ。

さて、三時間ほど経過したところで通路から猫が飛び出してきた。私がびっくりしていると、「この喫茶店気に入ってくれた？」

ちょりさんは事前に、私についての数少ない情報と、分からない部分を加味して喫茶店をわざわざ選んでくれていたのだった。今日初めて会う、もしかしたらもう会わないことになるかもしれない私のために、だ。ちょりさん自身もこの喫茶店にすごく馴染んでいて、店の雰囲気はちょりさんの話に入り込むのに充分すぎるほどの効果をもたらしていた。これもちょりさんの〝演出〟なのだと気付いたのは家に帰ってからのことだった。店はちょりさんのものではないけれど、そこは完全に〝ちょりワールド〟だった。

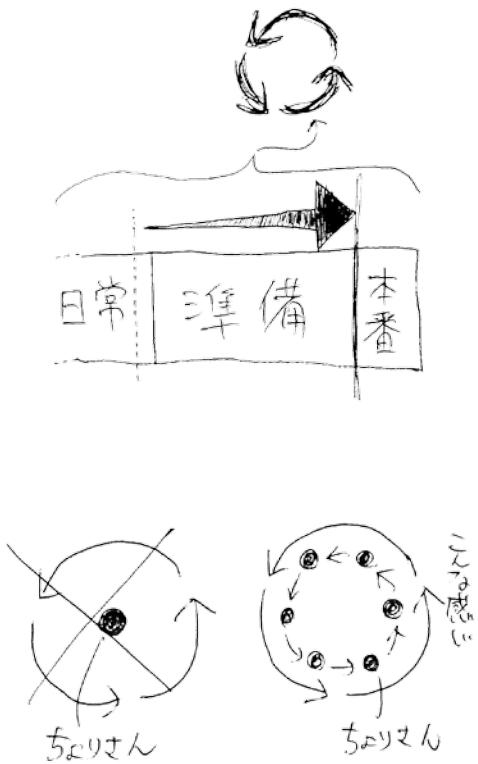
余談だが、今回ちょりさんが遅刻した理由は《ぐるヤミ》拠点の近所に住むおばちゃんとお

喋りをしていたからだと言う。「普段あまり話しかけてこない人だったので、今日がチャンスだった」のだ。急いでいたとしても、人とのつながりを大切にしたいというちょりさんの感覚にとても好感を持った。何でか分からないけれど人が集まってくる、という現象を引き起こすのはすごい才能だ。ちょりさんの人柄を知って、楽しいことが連鎖的に生まれている状況にも知らず知らず納得できてしまった。

ちなみに彼女は、私のあとにあと二人と会う予定があった。こまめに移動し、人と会い、時間を過ごすなかで様々な出来事を仕掛けていく。ちょりさんに休みはない（いや、休みとかプロジェクトとか遊びとか、そういうのに垣根自体がないようにも見える……）。

ワカラナイものをワカラナイまま受け取って、ワカラナイけど面白い！ワカラナイのが面白い！と感じることは、もしかしてすごく大切なことで、けれどちょっとコツの要ることなのではないかと思う。それを知りたい。むやみに突っついて答えを探ったら、きっと花は閉じてしまうだろう。だから私ものんびりと、朝顔でも観察するみたいに《ぐるヤミ》のことを観察してみたいと思う。

こうして、《ぐるヤミ》の「観察日記」は始まったのであった。



観察日記メモ①

妄想の仕組み

一〇月一八日（木）雨
〜高円寺・8オフィスにて〜

いったい《ぐるヤミ》って何なのだろう。ちょりさんとの出会いから数日、まったくその答えが見つからないまま次の「観察日」を迎えた。まだ具体的な活動を見ていないのだから当然と言えばそうなのだが、何しろ謎が多すぎて何から聞いてよいのか分からない。

今日のちょりさんはコアラのマーチを持っていた。チョコ味といちご味の二箱を、彼女は私の話し始めと同時に手近な箱へざらざらと全部空けてしまった。いろんな柄が、あるよね。そう言ってハロウィンバージョンになったコアラたちをいくつか摘み上げて机に並べる。何のまじないだろうかと一瞬思ったが、すぐに満足してそれらも全部箱へ戻す。

コアラのマーチを二箱同時に開封する人を、小さなことだが私は初めて見た。そしてそれを、フルーツティと一緒に私の前へずずいと差し出すと、何事もなかったように会話が始まった。

《ぐるヤミ》を語るうえで最も重要なのが〈谷中妄想ツァー!!〉（以下、ツァー!!と表記）と

いう企画だ。ちょりさんが学生時代に研究室と共同でつくったもので、これをきっかけにして《ぐるヤミ》という一連の活動が誕生した（ツアーではない、ツァー!!である！）。今回はこの企画をベースに《ぐるヤミ》について話を聞いてみた。

まず最初に気になったのは「妄想」という言葉だ。あまりよい印象を持たない言葉だが、ちょりさんの話から想定すると、「想像より根拠がなくて、それゆえ自由な発想」という感じだろうか。前回の彼女の言葉通り、ちょりさんは特定の狙いがあって何か行動を起こすわけではない。この企画の構想段階でも、「妄想なんですけど……こんな感じになったらいいなぁ」と何度も繰り返し、形になりそうな、ならなそうな話をしたそうな。それを聞いた研究室の熊倉純子教授が「いいじゃない、妄想。それでいきましょう」と一言。そう、根拠がなくて、でも「いいなぁ」と思える思念で谷中を包むこと。そういうふんわりとしたものが本企画の出発点なのであった。ここでは〝妄想〟＝「ワケガワカライけど何かいいなぁと思うこと」と捉えていただければ概ねよいかと思う。

でも、ちょりさん一人の妄想だけではまだ始まらない。当然だが、一つプロジェクトをやるにもたくさんの人手が必要になる。その一人ひとりにも〝私の妄想〟があるはずだ。関わる人はきっと、谷中が好きだったり面白そうなことをしたい人たちだから。言いだしっぺはちょりさんだが、プロジェクトを動かすのはその全員である。だから、ちょりさんをはじめ各々が〝私の妄想〟を持って集まり、ああでもないこうでもないと、みんなでぐるぐる妄想を膨らませた。

当然、折り合いのつかない妄想もあるだろう。譲れない部分も出てくるだろう。でも、みんなで何かを考えるということは、一人では生み出せない大きな力を生む絶好のチャンスでもある。ちょりさん曰く、一人ひとりが完全に誰かと重なるということはなく、むしろ表面張力でぎりぎりつながっているくらいがちょうどいいのだ、と。

そうやって生まれた〝みんなの妄想〟が谷中のまちを覆うことで〝妄想谷中〟が誕生した。

「いいなぁ」の最終地点は「いろんな人が集まること」だとちょりさんは言う。

この企画で言えば、まちのため、つまり地域振興が目的では決してないということだ。というより、まちなどという大きなものに影響を与えてしまおうとは彼女たち自身考えていない。あくまで、たくさんの人が集まって、そのなかで〝個人対個人〟の間に何が発生するのかを見てみたい。という好奇心が先行しているようだ。

多くのアーティストは、自ら莫大なエネルギーを練り上げ、不特定多数に向かって表現することのできる〝強い〟人種だ。そういう人はそのまま表現してくれればいい。でも、そうではない人たちの、まだ表現されていない〝ぐるぐる〟はどうしたらよいのか。ちょりさんの出した答えはこうだ――

顔の見えない誰かではなく、目の前にいる、触れられる距離にいる具体的な誰かと一緒になることで生まれる表現・空気感があるのではないか。

この人に出会えたから今この言葉が出たんだ、という経験はきっと誰にでもあるはず。いつも同じ人と同じように会って生活するだけでは、新しい表現は生まれない。逆に言えば、偶然出会った誰かが自分の新しい何かを見つけてくれるかもしれないのだ。その環境・仕組みをつくり、〝アート〟を手段にして、人と人を出会わせる。さあ、あとは参加者のあなた次第。どうやら〈ツァー!!〉とは、そんな企画のようだ。

《ぐるヤミ》の参加者・運営スタッフは様々な人間で構成されている。主婦に始まり大学生、近所のおばあちゃん、幼稚園生、ＯＬ、若手アーティスト、表現好きなおじさんたち……。言い忘れていたが、ここでは参加者と運営側は明確に線引きされていない。参加するうち運営の手伝いをし始める人もいれば、運営側にいた人がふと新しい何かを参加者からもらったりすることもしばしば。運営も表現もアーティストだけの特権ではないのだ。

「日常と非日常の間――すごすぎないくらいの方が妄想を掻き立ててくれるんだよね。特別な目立った能力がない人でもそれが活かせる仕組みをつくるために、密に計画を練るんだ」

〝アート〟というと、どうしてもセンスの世界と考えがちである。確かに表現者でないと分からないことも多いだろうが、「仕組みをつくる」というのは創造的であるのと同時に、何と言

うか〝作業的〟だ。純粋な〝アート〟と〝アートプロジェクト〟の違いはここにあるのではないか。職人技でしかつくれない繊細な料理がアートなら、それを誰でも美味しくつくれるレシピを考案することがアートプロジェクト。ちょりさんの行っているのは、まさしくアートプロジェクトなのだと改めて思わされる。

さらにちょりさんは言う。

「ここで生まれた空気は、その人が生きていくなかで続いていく」

……かっこいいこと言った！と私は傍らで一人にやける。

アートと言わずどんなことにも当てはまるが、経験というものは、少なからず人生を変えていく。そこに自覚的であるということは、アートプロジェクトを企画する人間としてとても大事な条件なのだ。

ちょりさんの〝仕組みづくり〟にはもう一つ重要なものがある。先述したものは表現することに重きが置かれていたが、こちらは鑑賞する側に対する仕組みだ。

それは「何でもない時間を味わう空気をつくる」ということ。作品一つをぽんと放られたとき、即座に反応＝味わうことのできない人が多い……というのがちょりさんの実感としてあった。まちという日常をぶらぶら歩く、それだけで人はいろんなことを感じるものだ。のんびりまち歩き、なんてなかなかしない人たちに、その楽しみ方をこっそり教え込んでしまおうという巧妙な仕組みがここにもあるのである。

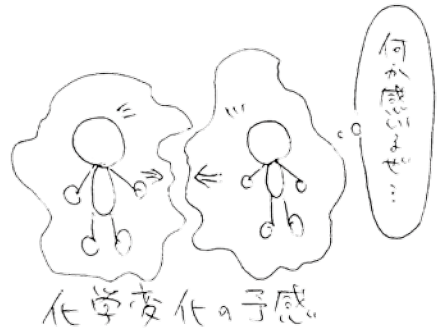
へぇ〜、と感心して聞き入ってしまった私だが、一つ疑問が残っていた。

「あの、何で『ツァー!!』っていう企画名にしたんですか」

「いや、何なんだろうね……学生の一人が『ツアーの進化系なのでツァー!!ですね』って言ったんだよね」

ちょりさんは、いつもタイトルをつけ、最初に言葉を発明したあとに、これって何なのだろうと考えながら形を与えていくのだとか。

「妄想」に「ツァー!!」……何とも鋭い言語感覚である。目の前に散らばるたくさんの言葉から、こういうものを臆することなく摘み上げ、机の端に一つ一つ並べていくちょりさん。わくわくした面持ちで、それら全てに新たな意味（つまり命）を与えては、まちに再び放っていく様子が想像できるのはコアラのマーチのせいだろうか？



観察日記メモ②

谷中の庵

一〇月二八日（日）晴れ
〜上野桜木・旧平櫛田中邸（ひらくしでんちゅう）にて〜

秋の空は綺麗すぎて、逆に心許ない。ラップをかけ忘れた栗御飯が冷たく干乾びてしまうみたいに、せっかくの太陽光も昨日の雨の潤いも、雲一つない空の向こう側へ蒸発してしまった気分だ。風が強く、身体を前倒しにして首をすぼめながら歩く。

「何かいろいろやってると思うから、おいでよ」

数日前にそんな感じで誘われ、とある場所の住所を教わった。谷中霊園を抜けて住宅の密集する路地をうろうろするが、なかなか見つからない。私は早くも不安に駆られていた。その不安というのは、迷子的それや空の蒼さにも似てはいるが、実のところ目的地に着いてからのことを考えていたせいなのだ。

ちょりさんの言っていた〝何か〟って何だろう。やることを決めないで集まるのが《ぐるヤミ》流、というのは前回までの話を聞いて分かった。しかし、実際我が身を以てしてみると、

何をやるかワカラナイ状態で集まるというのはとても不安な気持ちになるものだ。やることが決まっていた方が、楽なのは確かである。私は何をしたらいいのだろう……？

と、携帯のアプリで住所検索しているところに、どこからともなく変な音が聞こえてきた。空耳かと思ったが、耳を澄ませると、途切れ途切れに何かの音がする。ピアニカかリコーダーか、とにかく小学生が宿題と称して鳴らすみたいな音なのだが、旋律が妙だ。つまり、小学生のそれとは明らかに異なる抑揚をもっている。音の方へふらふら進んでみると、思いがけず、袋小路の奥に立派な日本家屋を発見したのだ。

恐る恐る近づいていくと、笑い声と共に床を踏み鳴らしたり手を叩く音が聞こえてきた。空耳ではないようだ。何か民族的なリズムに聞こえたりもして、そわそわとする。もう疑いようがなかった。これは〝《ぐるヤミ》の音〟だ！

駆け込むように門を潜ると、木造建築はしっとりと佇んで私と向き合う。ここが今日の目的地、平櫛田中邸である。なぜか、包み込まれるような印象のある不思議な建物だ。

がたがたと鳴る木戸を開けて玄関を上がり、滑らかな木肌を冷えた足先に感じながら、暗い廊下を壁伝いに進んだ。ふと、急に音が止まる。息を潜める。何やら喋り声。そしてまた音楽が始まると、無国籍な旋律の歌声が響きわたる。

音のする部屋は、進行方向より一〇時の方角に、つまり斜めに扉がついていた。いったいどうしてそうなったのか、奇妙な部屋に、私は動揺を隠せない状態で踏み込む――。

急に眩しくなって目を細めると、見えてきたのは吹き抜けの広い空間と立派な梁。明り取りの窓が天井に、そして壁の三面を擦りガラスが覆い、部屋はやわらかい光に包まれていた。室内はどこも木材が敷き詰められ、とりわけ床は、大勢の人間の足裏で磨かれてきたであろう黒い艶を放っていた。そのまんなかでちょりさんが静かに踊っていた。

思わず息を呑む。誰かが踊るという行為を久しぶりに見た気がするからだ。テレビや舞台で目にする〝見せる〟ためのダンスではなく、ただ純粋に〝行為〟としてのダンスを。

部屋にはもう三人いて、気付けば何かの音楽が鳴りはじめていた。緩やかな旋律の、どこか懐かしい曲に合わせて部屋にいた四人が踊りだす。輪になって歩きながら踊るのは……盆踊り？

きょとんとする私に気付いた男の人が、踊りの手を中途半端に止め（しかし何となく踊りながら）解説を入れてくれた。

「今度、北千住の小学校で、子供たちと踊るんだ、シャボン玉の、なかで」

男の人は日本舞踊でもやっているかのごとく指先を優美に揃えて軽く膝を曲げた。一つひとつの所作に〝ため〟がある。かと思うとぴよーんと飛び上がって笑顔。

「シャボン玉のアーティストとコラボして、小学校で地域の人たちとシャボン踊りを踊るんだけど、今つくってる最中でさ。シャボン玉がぶわーってたっくさん飛ぶなかで踊るの」

ちょりさんが踊りの輪から外れて言った。脇の机に置かれた紙を手に取り、歌いだす。知っ

ているのとは少し異なるちょりさんの声が、高く低くアトリエに反響する。

歌もまた、久しぶりだ。歌とか踊りというのは、一瞬で人を別の世界へ引き込む魔法なのだと、改めて実感する。と同時に、その魔法をみんながもっと自由に使えるようになれば面白いのにとも思う。

そうこうしているうちにも、彼らは振付を改良したり歌詞をあれこれつけたりする。「ジャンプを入れればここはこどもたちもできるね」「踊りをやってるおばちゃんたちも踊り甲斐のあるようにしないとね」「三十分くらいで覚えられるかな。歌詞は何度も聞いてやっと少し分かるくらいの感じで」……。踊る人は久しぶりだが、音頭をつくる人たちは初めて見た。目の前で音楽が、踊りが生まれる光景に立ち会う。

男の人は〝おーにしさん〟と言った。カメラを構えて音頭制作風景を撮るのは〝りえさん〟。もう一人の女の人は音頭を作曲した〝グッフィーさん〟だ。ちょりさん以外の関係者に会うのは初めてなので緊張する。しかし彼らは、特にいろいろ喋りかけてきたりもせず、私がメモを取っていることも気に留めない。何か話さなきゃ、とか、あれとこれと質問して、とか考えていたのは初めのうちだけで、途中からだんだんシャボン踊り制作風景を眺めることに徹するようになった。それは自然な流れだったように思う。

時間はゆっくりと流れていた。音頭の旋律のせいか、天窓から射す光のせいか、アトリエ

——彫刻家、平櫛田中氏のアトリエ用につくられた部屋だったそうだ——の空気は私を白昼夢へと誘いかけた。そうか分かったぞ。門から入ったとき包みこまれるように感じたのは、このアトリエが陽の光を受けるため斜めに建てられていたからだ。手を広げるような形で、庭を、半周かこんで……。

おっといけない、ええと今は何をしているところだったかな。しかし思い出せない。否、別に何もしていなかったのだ。もう少し正確に言えば、このアトリエに広がるいろんなものを、とにかく全身に浴びていたという感じだろうか。気付けば陽は傾いていた。

ちょりさんの言っていた〝何か〟とは、「シャボン踊り」を指していると見せかけて、実のところこの時間全体を指していたのではないかと思えてくる。空気感という言葉を彼女はよく使うけれど、私もそれに触れてか創作意欲を掻き立てられる。音頭のこと、アトリエのこと、田中邸や谷中の路地のこと、気付いたらいろいろとメモを取っていた。もしかして今日は、習うより慣れろということで、この空気感に触れるために呼ばれたのだろうか。……などと深読みしても詮なきこと。ちょりさんの思惑は思惑、私は私で贅沢な時間を過ごせたことに心は満たされたのだから、きっとそれでＯＫなのだ。要は、楽しめたかどうかが大事なのだ。

そういえばさっき、田中邸の門の脇におばあちゃんが二人いた。立ち話をしている様子だったが、私が近づくとこちらを向いた。こんにちは、と声をかけると、にっこり笑って声が返っ

てくる。例の不思議な音が響くなかで、である。その建物へ吸い込まれていく私に対しても全く不審な視線を向けず、むしろ「あら、あなたもお仲間?」と問う感じの親しい表情を向けられたのが印象的だった。

ふと思い出して、ちょりさんに訊ねた。谷中へ来て観察を始めたときから、ずっと気になっていた大きな疑問だ。

「何で谷中なんですか」

「勘」

一言、そう断言された。いや、いろいろ理由はあるのだが、突き詰めてみれば「何かありそう」というちょりさんの嗅覚が、彼女を谷中へ引き込んだということのようである。

一般に言われるのが、台東区は山あり谷あり町あり、文化が栄える場所としての条件が揃った場所だということだ。もともと住民の意識が高く文化財も多く残っている。田中邸もまた然り。古いものが大切にされているだけでなく、この地には常に新しい風も吹いているようだ。新旧入り混じった不思議な空間——ちょりさん言うところの〝ざわめき感〟が、写真や絵や踊りをつくりだす人にとってどんな影響を与えるのだろう。そこから何が生まれるのだろう。それを知るためにはまず一石投じてみないことには分からない、とにかく実際にやってみよう。というのが、ちょりさんの谷中という地に根を降ろす一番の理由である。

もっとも、既に文化度の非常に高い地でわざわざ文化発信を試みる必要があるのか、という

批判もあった。しかし、ちょりさんは「まだ足りない、やっとここからだ」と、この土地の未来に、新しい価値観が生まれることを強く確信していた。

ちょりさんはこの地に住み、一つの発明をしようとしている。名前はまだついていないが、一言でいえば〝アートが生まれ続ける仕組みづくり〟である。なぜ人は歌うのか。なぜ身体が踊りだすのか。といった根源的な問いに興味をもち、学生時代自らの制作活動を通じて、研究を重ねてきたちょりさん。そこから逆算して、「こういう環境があれば人は創作活動をし続けることができる」という仕組みづくりの拠点に、彼女は谷中を選んだ。

そのためにはまず土地を知らなければいけない。町や人と長く付き合ってみなければ見えないことばかりだ。そして複雑な人間関係が作品を生むのであれば、それができるまで待つ……。今は結果としての作品より、人間関係や創作意欲の大元となる、〝予感・気配〟をつくりだす段階であるという。作品という〝形〟を残してしまうと、それが何かの基準や模範解答（ちょりさん曰く「神」）となってしまう恐れがある。その基準に適う人ばかりが集まるのではなく、いろんな人が集まって心が動く人間関係をつくることの方が今はずっと大事なのだと。

「いろんなものを信じる人が共存するためには、先に神をつくっちゃいけない」

何年かかるか分からない。多くの人を一気に呼び寄せることでもない。時間も労力もひどくかかるし、何より成功するとは限らない。それほど、土地に根差した〝文化〟をつくるということは大変な作業だ。

ちょりさんは最初からそのつもりで谷中へ来ている。

「一生をかけて挑戦しても足らないくらいかもしれない」

……それにしても、具体的なモノをつくるより仕組みを構築するというのは恐ろしく難しく根気のいることではないだろうか。

アトリエの壁には、仏壇を置くような箱型のスペースが穿ってある。その中心にはうんと細かに皺を刻まれた木彫り人形が一体と、最奥の壁に一片の新聞記事。こんな見出しが飾られていた。

「六十、七十は鼻たれ小僧、男ざかりは百から百から、わしもこれからこれから」

平櫛田中氏の残した言葉だ。これを見ると、目先のことにばかり焦っている自分がばかばかしくなってくる。ちょりさんのプロジェクトもそうだが、今日明日だけ頑張って何か変わるようなものは、きっと自分にとって本当に大切なものではないのだ。もっと時間をかけて何かを見つける目と体力を得ることが、創作活動を続けていくうえでとても大事なことなのだと思えてくる。

木はっちへいらっしゃい

一〇月三〇日（火）曇り

〜上野桜木・木はっちにて〜

平櫛田中邸のすぐ近くに《ぐるヤミ》のアジトがある。アジトと呼びたくなるのは、入り組んだ路地にある何の変哲もない一軒家のなかにひっそりとあるからだ。歴史のある昭和建築の一階部分を間借りしているという。名を〈木はっち〉という。

呼び鈴を鳴らすと、私が誰かも確認せずに奥から「どうぞー」と聞こえてきた。昔ながらの家についている、玄関扉のすぐ手前の目隠し戸を開けると、りえさんが向こうの玄関を開けてくれる。りえさんは、親戚のお姉さんというのを私に想像させる。夏休みとかお正月に会うたび、膝を折って「元気だった?」と訊ね、手を引いて他の従兄弟たちのところへ連れて行ってくれる、あのお姉さんだ。

彼女の明るい声につられて、「お邪魔しまーす」と大きく挨拶し、玄関を上がる。台所や風呂場が無防備に覗かれる廊下を進み、そのうち一つの襖を開けると、そこがアジト部屋だ。

なかは畳の部屋で、二台のパソコンと机、たくさんの書類に掲示板といきなり現代的な雰囲

気だ。でも窓の擦りガラスには目隠しの生垣がうっすらと映り、その奥では京成本線の走り抜ける音がかすかに響く。うん、やっぱり谷中なんだ。

二台のパソコンの前には、それぞれりえさんと、眼鏡の男の人が座っている。挨拶をしたり座を整えたりしながらばたばたとするが、四人の大人が動き回るには狭すぎる四畳半の部屋だ。どうぞどうぞ、と勧められたのは手作りの椅子だが、みんな畳に座っているので椅子を机代わりに畳へ正座する。してから、正座は違うようだと思い直して脚を崩した。「近所のおばさんからもらった」と、りえさんが運んできたブドウを囲みながら話をしはじめる。ちなみにこの時点で私が予定を押してしまい、開始が一時間ほど遅れていた。それを気にもとめない雰囲気が恐縮以上の念を私に感じさせる。

眼鏡の人は〝ヤマダさん〟と言った。学生のようだが私はなぜか敬語でヤマダさん、と呼んでしまう。ここにいる人はみんな先輩に見える。しかし今この時点で学生ということは、ヤマダさんも〈ツァー!!〉からずっと《ぐるヤミ》をやってきたわけではなさそうだ。というより〝起点〟としてのちょりさんがいるのなら、みんな他の人はどこかの時点で何かをきっかけにして入ってきた人ということになる。

そういえば、ここに集まる人たちってどういう人たちなのだろうとずっと思っていた。先日お邪魔したお茶会を主催した《おかって》スタッフの〝アラホリさん〟も、平日は仕事、休日

は《おかって》というふうに活動していると聞いたが、知らないうちに「片足から両足突っ込んでた」と笑っていた。

「《ぐるヤミ》に関わるきっかけって何だったんですか」

これが今決めた今日の大きなテーマだ。さっそくぶつけてみると、ヤマダさんはうーん、と唸って曖昧な表情を浮かべた——顔半分がマスクで覆われていて曖昧どころではないが。

「大学の研究室でどこかのプロジェクトに必ず入ることになるんですけど、たまたま先輩から誘われて……」

一度参加をしたことのある《ぐるヤミ》に興味を持ち、誘われるがままにスタッフとして〈妄想カフェ〉の手伝いをしたところから始まったそうだ。いくつかのプロジェクトを体験してみて最終的に《ぐるヤミ》を選んだ理由だが、続いて出てきたのは「ワカラナイ」という言葉だった。

「何をやっているのかワカラナカッタから。音楽でも演劇でもなく、何だろうっていう〝謎〟がすごく気になって」

「謎っていうのはメリットであり、デメリットでもあるんだけどね。でもとにかく《ぐるヤミ》というのは〝謎〟が最大の魅力なんじゃないかな」とりえさんは笑った。

実際《ぐるヤミ》に関わっている人のほとんどは、この謎に惹かれているのではないかと思う。どの人も、プロジェクト全体に関わって興味を持つというより、何か一つイベントに出てみて「何だかワカラナイけど、面白そう」というふうに入ってくるそうだ。まず全体を俯瞰した言

葉なり設計図なりがないプロジェクトなので、確かにそれ以外の入り方はないのだろう。だから、全員が一つの方向を見て何かに向かって、というようなことにはならない。もともと外から見ていた人たちが言う「この前やったあれ、こうしたらもっと面白くなるんじゃないの」「またこういうことやってみたいな」の積み重ねが今の《ぐるヤミ》をつくっている。輪郭は至って曖昧だが、そのもやもやとしたところに強力なトリモチみたいなのがついていて、引っ掛かったら取れないようになっている。そんな感じだ。

りえさんにもきっかけを聞いてみた。彼女は《おかって》の立ち上げメンバーでもあるから気になるところだが、やはり「何でだろうねえ」という感じの返答だった。代わりに《おかって》法人化のときの話を聞かせてもらうことに。

りえさんとちょりさんは旧知の仲だと思っていたが、そうではないようだ。二〇〇八年の《おかって》設立のときに、知り合いの紹介でやってきたのがりえさんだった。そこから《ぐるヤミ》の継続の話が出て、ちょりさんが大学院卒業と同時に二人で会社設立、というところまで話はどんどん進んでいった。当時勤め人だったりえさんが会社を辞めたのを契機に、《おかって》づくりは本格化していった。

が、会社を設立するには、公証役場というところで必要な書類を専門家と相談しながら揃えなければいけないらしい。役場で公証人のおじさんがまずひとこと。「君たち、いったい何を

やりたいんだ?」

結果から言えば『文化イベントを開発・運営し人々の交流をうながす会社』ということで収まったのだが、二人とも「これをやるんだ!」というのを胸に刻んだりしないで着の身着のまま役場へ出掛けて行ったことを思うと、今聞いている私までどぎまぎする。あ、お醤油足りないわ、ちょっと酒屋まで行ってきますねという感じで(財布を忘れて)出掛けていったサザエさんのように気軽だ。現場はもっと真剣に違いないが、それでも二人は〝決めない〟で行った。

お財布もカバンも印鑑ももちろん持っていたであろう二人、緊張もしていたであろう二人を想像する。これをやろう、というより、人や出来事に反応してその状況状況で次のことをやるというスタンスの二人の顔は、きっと何だか旅をしている人みたいに楽しそうだっただろう。この先に何があるんだろうね、という顔。

私は、食べたいものを先に決めて、それから冷蔵庫のなかを見る人間だ。そして冷蔵庫になかったら面倒な食材でもわざわざ遠出して買って来て、「これをつくる!」像に極力近づける。でも《ぐるヤミ》は、まず冷蔵庫を見るのだ。これとこれで何かつくったら美味しくなりそうだぞ、という想像力を使って実際に動ける力を持っている。実際《ぐるヤミ》は、場所や人というような機会をまず与えられて、そこから「何かしてみて」と言われることが多い。

「たまに冷蔵庫の中身空っぽだったりするけどね」ちょりさんが言うと、

「でも、何が来ても困らないように調味料と道具だけは揃えておくみたいな」りえさんが継ぐ。

調味料や道具はそれぞれ、彼女たちの感受性、そして今までの経験の蓄積と言えよう。

もし必要になれば、ラーメン屋にでも猟師にでもなるとちょりさんは言った。

「目的が明確にあって、それに向かって順調に進むなんてことあり得ないんじゃないかな。考えているうちに行動はどんどん先に進んでいくし、そうしないと何も生まれないんだから」

確かに、何か最初から決めて行動を起こすなら一つの作品をつくる、つまり結論を自分で出してそれをみんなに提示する方がずっと早い。しかし、アートプロジェクトは一人ではつくれない。一人ではないからこそ、プロジェクトとして〝物語〟が動きだす。問題提起から「みんなで考えよう」というのが、よくも悪くもアートプロジェクトの大きな一側面なのだ。そしてそのアートプロジェクトの特徴を大きく飛躍させたものが《ぐるヤミ》である。やっている側もどこへ向かうか分からない、それがヤマダさんの言う〝謎〟につながるわけだ。

「アートは根本的に〝自信のないもの〟。そこに何かがあると信じる行為のことをアートと呼ぶのだと思う」

ちょりさんの哲学だ。前回の、作品をつくらないということに対する無神論というか多神論というか、見方を一つに定めないでいろんな可能性に悩んでみるというのがここにも表れているように思う。

とは言え、何となくやってそれで終わり、というわけにいかないのがアートプロジェクトで

ある。特に何も決めていないと先述したが、ちょりさんの目的は確かにある。谷中での〝作品を生み出し続ける仕組みの発明〟だ。そもそも《ぐるヤミ》はそのためにつくられた。会社設立の文書にも「開発」という言葉が使われているように、何かの〝仕組みをつくる〟ということが唯一の柱と言ってよいだろう。ならば論点はそこにあるはずだ。

後世に残るもの、文化となるものには仕組みや技がある。ちょうど、料理の巧い人が毎日何気なくやっている行為のなかに、美味しい料理のノウハウが隠れているように。本人は自覚していなくても、それが受け継がれることで文化となり得ていくように。

各自が自由なことをやっているように見える《ぐるヤミ》も、長期的に見るとレベルがだんだんと上がっていっていることが分かるという。団体内の価値基準が強化・共有され、今まで面白いと思っていたものが物足りなく感じたり、もっと新しいことに手を出す技術が身についたりしていく。また、人との関わり方のバリエーションも増えた。でもそれは単純にセンスという言葉で片付けてはいけない。みんなが技を習得した結果なのだ。

「お茶を濁すのだって、いいかげんさの現れではなく、日本の伝統的な〝技術〟なんだ」

言葉に残して後続の人たちがそれを受け継いだり参考にしたりできれば、それは立派な文化である。《ぐるヤミ》がやろうとしているのは、それを目指すためのアーカイブだ。アートプロジェクトと今や切っても切れない関係にあるアーカイブという行為。《ぐるヤミ》を通して、やっとその意味が分かってきた。一人では結論も出せなければ成立させることもできないもの、

それが文化だ。アートプロジェクトという存在自体が、文化をつくる行為なのではないかと思う。でも、それが文化となり得るかは、今この場で判断することではない。もっとずっとあとで、決まることだ。

だから、今は必要とされていることを、今必要だと思うことを一つずつやっていくしかないのだ。そしてそこから技術を抽出し、仕組みの発明に落とし込む。私もこのアートプロジェクトにまつわる〝謎〟を解明してみたいとちょうど思っていたところだ、トリモチにもうちょっとくっついてみよう。

帰りはやはり、「お邪魔しましたー」と言って玄関を出る。「またいらっしゃい」とりえさんは手を振ってくれた。ちなみに彼女は《ぐるヤミ》の事務局長であるのだが、それを知って、ますます私のなかで〝お姉さん感〟が強くなったのであった。

こんなふうに、いろんな人が〝ワカラナイ〟状態のままふらりと入っては出て、また入ってくるのだろうと思うと面白い。そして、「またいらっしゃい」となるわけだ。輪郭の曖昧さ、という言葉がいろいろなものにくっついて思い浮かぶ。

門から角を曲がると、さっきのアジト部屋から煌々と灯りが漏れていたが、生垣で奥の様子はすっかり隠されていた。やっぱりアジトだなあと感心する。京成本線はのろのろとした動きのくせに、くぐもった音を反響させて通り過ぎた。文化、という言葉のよく似合う風景だ。

真剣な話し合いの風景

一一月八日（木）晴れ

〜上野桜木・木はっちにて〜

〈木はっち〉へ行くと、表や図形の描かれた紙を一枚もらった。手書きで、あちこち線で消されたり矢印が伸びたりしている。四年近くのキャリアをもつこのプロジェクトは、今まであまり体系化されてこなかったと聞く。それらを改めて整理したものがこの表や図なわけだが、こうして見てみると意外と（！）整然としている。というのも、今まで感覚的な話が多かったせいか、《ぐるヤミ》と書類全般とのイメージが私のなかで重ならなかったのだ。何だかすみませんという感じである。

表の縦の並びには今まで《ぐるヤミ》が行ってきたプロジェクト名が記されており、おおまかにグループ分けがされている。横の並びにはそれぞれのプロジェクトがどのような機能を果たしたのか書き込めるように項目が設けられており、そして縦と横の重なったマス（斜線や空白になる部分）にはこう書かれていた。

『ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクトは、間をつくっていた?!』

「間」という文字が濃く書かれ、その上にはさらに「あそび」と枠で囲って書かれていた。一見設計図のようにも思えたが、じっと見ていると〝実験結果〟という言葉が浮かんできた。

ちょうどこの日、私は十分ほど遅刻した。慌てて〈木はっち〉のアジト部屋へ入ると、そこにはメンバーが集まり、互いに駄目出しをしたり足りない部分の指摘のようなものをしている最中だったのだ。和やかなイメージの《ぐるヤミ》の人たちが運営についてがつがつ議論している！と少し失礼なことを思ってしまったが、今までちょりさんの話を中心に聞いてきた私にとって〝企画運営＝ちょりさん〟というくらいで考えていた《ぐるヤミ》が、いろんな側面をもっていることにここで気付いた。メンバーそれぞれが自分の《ぐるヤミ》を持っていて、それがぶつかりあい、ときには欠けたりくっついたりして、誰にも想像できない形ができあがっていく、今がその〝最中〟なのだと、ふと思い至る。だから、設計図ではなく実験結果に見えたのだ。

「いや、それ違う気がするよ、ちょり」

おーにしさんの言葉がふと耳に入り、我に返る。綺麗に折りたたんだハンカチをイメージさせるおーにしさんの声は、ぴしっとちょりさんの正面に差し出されていた。

「うん、おーにしの言いたいことは分かるけど。そのことじゃなくて……」

と言うちょりさんの言葉を聞きながら、手元の紙に何やら書きつけるりえさん。

交わされる言葉の不可解さ（「それだと〝何かしてる〟ことになるよ」とか「無駄が足りない」とか）と、それに相反する真顔での議論はしばらく続いた。私は居場所を失って手元の紙とにらめっこする。真剣に活動しなければ真剣に議論することもないのだ。彼らのそんな一面は、私が知らないだけできっと珍しくないのだろう。こんなふうに何年もかけて彼らの言語が構築されてきたのだと思うと、ちょっと話を聞いたくらいで何かを理解しようとは虫のいい話だと苦笑する。

まだ私の知らないたくさんの〝ぐるヤミ専門用語〟が入り乱れる。ここの人たちは、ここでしか通用しない言葉や言葉の意味を数え切れないほど持っていて、それを操って会話するのだ。何を言っているのかワカラナイときもままあるのだが、その頭上のやりとりが〝何かの〟プロっぽくもあり、秘密組織のようであり、ちょっと羨ましい。

言語は覚えたり学んだりするものでなく、身につくものだ。実際に見たり聞いたり使ったりを繰り返して初めて、その言葉を掴むことができる。メンバーの人たちは、何気ない日常を贅沢に共有しながら、少しずつ、確実に言語的結びつきを強めていっているのだろう。今がまさに、その〝実験現場〟なのだ。

彼らが議論している間、ハロゲンヒーターが私の顔の側面をじっと照らしていた。直接的すぎるハロゲンの暖かさに冬の到来を、そしてこの小さな部屋の温度を感じた。

あそびと暇人愛

一一月二〇日（火）曇り時々晴れ
〜上野桜木・木はっちにて〜

最近しょっちゅう〈木はっち〉にいる気がする。呼び鈴を押すとりえさんが「寒かったでしょう」と出迎えてくれて、私は玄関の内側でほっと息をつく。出されたスリッパを履いてりえさんの後に続く。相変わらずモノの多いアジト部屋だが、最近は何となくその配置も分かってくるようになった。本棚にはアートプロジェクトやアートマネジメントの本がたくさんあるが、その隙間隙間に手塚治虫の短編集や図鑑のような本がたくさん詰め込まれている。スペイン土産だという極彩色のモビール、コケシにお札、〈ぐるぐるミックス〉でつくった作品……。書類や備品の他にもいろんなモノが部屋に配置され、そのどれもがあるべくしてそこにあるような存在感を放っている。それがまた、なぜか落ち着くのだ。

台所に立っていたりえさんが皿を手に戻ってきた。

「ご近所さんから柿もらったんだ、よかったらどうぞ」

用件を忘れて私はついのんびりお喋りをしてしまう。りえさんはのほほんと構えて、全く関係ない私の悩みまで聞いてくれるのであった。彼女は《おかって》の窓口として〈木はっち〉で多くの時間を過ごしている。たまたま寄った近所の人や、アート関係の相談があって来る人たちの話もよく聞くそうだ。私自身もりえさんと話してみて、彼女が日夜いろんな〝訪問者〟から相談を持ちかけられるという話に納得してしまった。

「今はだいぶ落ち着いたけど、〈はっち〉時代なんかそのまま何時間も人が居座ったり、勝手に玄関に鉢植えしちゃったりする人がいてさ」

《谷中のおかって》の最初の拠点としていろんな人をつなぐ場所として開かれた〈はっち〉だが、その盛況ぶりはすさまじいものだったという。街のおじさんが何やってるのと覗きに来たり、お茶を飲みに来るおばさんがいたり、会社帰りのサラリーマンが来ることもあれば散歩ついでに寄った学生が上がり込んでごはんを食べて行ったりする。子供連れのお母さんが来たときはこどもたちが屯し、ときには「こども預かって！」とこどもを置いてどこかへ行ってしまうお母さんもいたそうだ。

リピーターが足繁く通うというよりは、新しい出会いが日々繰り返されていたという。これはとても好ましいことだ。〝内輪な関係〟が構成されないということは、誰でも気軽に「初めまして」が言える環境とも言える。しかも場の雰囲気が、新しく集まる人同士に前に出会ったことがあるかのような感覚を抱かせてしまう〝内輪感〟をもっているというのも〈はっち〉の

不思議な魅力の一つだろう。常に新しい風が吹きながらもみんなどこかでつながっているような関係は、狙ってつくれるものではなさそうだ。

開く側も来る側もこの現象を面白がりながら、しかし、なぜそんなことになっているのかは、遂に誰にも分からなかった。

そんな話の最中でやってきたちょりさん。彼女はそこに三つの仮説を立てた。

原因の一つは土地柄なのではないか。もともと地域のむすびつきの強い地域であること、そういった人々の、よくも悪くも図々しいところや気安さが生み出した空間だったのかもしれないということである。地域の人と同じくらいかそれ以上は外から来た人だったそうだが、彼らもこの地の空気にあてられて、思わず「何してるの?」と声をかけたくなったのだとしたら。それは既に一つの〝仕掛け〟と言ってもいいはずだ。ちょりさんがつくろうとしているのも、このように自然と人が行動を起こしてしまうような、そういう〝仕掛け〟なのだろうか。

二つ目は人。《ぐるヤミ》に集まる人たちが常に漂わせる「何かしたい」というような空気感が、〈はっち〉の扉を開いていたことで外に垂れ流しになっていたせいなのではないか。看板も出していないのに人が集まるのだから本当に不思議だ（ちなみにちょりさんは、どこへ行っても声を掛けられる体質らしい。帽子にサングラス、マスクまでつけているのに外国人に道を訊ねられたこともあるそうな。何かしら人が寄って来やすいオーラというのがあるのかもしれない。

りえさんはりえさんで、人から相談されやすいオーラを持っているような気がする。「ちょっと聞いてくれない?」という心の声に反応する能力なのかもしれないが)。

また、平日の昼間から街をぶらぶらしたり、軒先で何かをつくっている彼らの様子を見て、人々は怪訝というより好奇の眼差しを向けた。話しかけたり首を突っ込んだりしやすい〝隙〟を、最初は偶然だったのを、次第に意図的につくりだしていったのだとちょりさんは話してくれた。

そして二つ目に関連することだが、残る三つ目はニーズだ。

「本当に、何でもないときに何となく集まる場所って実はない。みんな、暇人の愛を欲しているんじゃないのかな……」

例えるなら『キャッツ♥アイ』の「喫茶キャッツアイ」、『めぞん一刻』の5号室（五代くんの部屋)。……とにかく、用がなくても話すことがなくても、行けば迎え入れ世話を焼いてくれる場所というのはとても貴重だ。友達でも家族でもなく、かといって他人然とはしていない。隣人ならぬ暇人がさりげなく与えてくれる優しさを、来る人たちは求めていたのではないかとちょりさんは分析する。

しかし、彼らは〝隙〟をつくりすぎた。〝暇〟も演出しすぎた。実際全く暇などではなかった。このとき既に法人化し、当然この活動もプロジェクトの一つとして動かしていた。人と触れ合うことも充分必要なことではあったが、次から次へと噂を聞きつけて人が訪れるので、その対

応をしているだけで、一日が終わってしまい、あまりに仕事にならなかったという。

「東京都の税金でやっていることを意識しすぎて、〝いろいろな人〟に対応しようとすればする程、夜中だろうが早朝だろうが、さまざまな習慣をもった人が出入りするから、寝る暇もなかった」

訪ねてくる人のなかには「僕〇〇やってるんです」「こういうことしたいんですけど」と相談してくる人も多くいたそうだ。そうすると「じゃあとりあえずここでやってみてよ」と場所を貸したり制作の手伝いをする。これがある意味求めていた形態でもあったのだが、このときの作品や個展、コンサートの記録を見せてもらおうとしたら、

「そういうの全然残ってないんだ。どこが本番で何がなんだか、そのときはまだ分からなかった。でもすごいたくさんやったよ」

と言われてしまった。このプロジェクトには、決してアーカイブ化できない、けれどたくさんの物事が層を成して今に至っているのだなと、そのとき気付いた。私が聞いていないだけで、もっとたくさんの面白いことが語られずに堆積しているのだろう。

そうこうしているうちに収拾がつかなくなり、〈はっち〉は二〇一二年三月でひとまず閉鎖することとなった。とはいえ、回想するにあたって一番〝《ぐるヤミ》っぽい〟時期というのは〈はっち〉で過ごした時間だったとちょりさんは言う。確かに、このごたごた感は私のイメージする《ぐるヤミ》像にかなりあてはまる。

〈はっち〉の混沌とした賑わいを、おーにしさんは公園だと例えた。好きなときに出入りして、好きなことをして、あるいは何もしないで、名前も知らない人と出会ったり、ちょっとだけ仲よくなったり。とにかく、いろんな人が集まる場所だったのだ。

「人は目的のない時間を求めている」

と、ちょりさん。人は、意味のあることばかりはやっていられない。意味のない、一見無駄とされてしまうことをするのはとても大切なことなのだ。人はそれを〝あそび〟と呼ぶ。この言葉が、前回の紙に書かれたものとつながってくる。《ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト》は間をつくっていたのか――いや、〝あそび〟をつくっていたのだと。

最終的にこのプロジェクトを定義するにあたって「拠点創造事業」と呼ぶことで落ち着いている。確かに、それは今まで話を聞いてきたなかで理解できることだった。では、何をつくっていたのかというと、それは場所ではなく空気感、間。つまり人と人の間にできる〝何か〟だ。しかし〝あそび〟と言った方が、何だか楽しそうだ。《ぐるヤミ》っぽい。

前回〝何かの〟プロみたいだと書いたが、彼らは言ってしまえば〝あそびのプロ集団〟だ。そして、目の前のものを〝あそび〟の材料（＝おもちゃ）にしてしまえる力が、ちょりさん最大の武器なのである。私の横で首をじじじと振っていたハロゲンに注目し、ちょりさんは言う。

「この灯りは照明にもなるし、オレンジ色だから〝夕方〟だね。これを暗くした部屋の一角においたらそこを〝夕方〟ってことにして何かできそう」

と、瞬時にイメージを言葉にしてくれた。こういったイメージの方法や、それをいかにしてプロジェクト化させるかといった部分をちょりさんは、言語化しようとしている。そうすることで、誰でも面白い〝あそび〟をつくることができるのではないか、というもくろみだ。それは料理のレシピに似ている。特別な技術がなくても読めばできるように仕立て直す作業だ。

〝あそぶ〟ということは特別な行為ではない。しかし、それを外に開くとなると、誰でもできることではない。そこはちょりさんや《ぐるヤミ》の特性なのだが、これらが法則化されれば、より多くの人がレジャーで終わらない真に充実した〝あそび〟をできるようになるかもしれない。それこそがアーカイブの意義である。〝あそぶ〟という行為自体、実はすごくコツのいる行為で、うまくできないで大人になってしまった人も多いのではないか。素朴に人と交わることが、実は必要とされているが、やり方を誰も知らない。

〈はっち〉閉鎖後も継続的に人と関わり続ける《ぐるヤミ》。人と関わるノウハウや、何でもあそびに変えてしまうスキルに研きをかけた今、〈木はっち〉の扉を解放したらいったいどうなるのだろうか。話を聞くだに恐ろしいが、面白そうだという思いも強い。《ぐるヤミ》の物理的拠点であり、活動の中心に常に存在する〝あそび〟としての拠点。これからどのように機能していくのだろうか。

ミックス！

二〇一三年一月二三日（水）晴れ
〜谷中・初音幼稚園にて〜

田中邸からリヤカーを出すとき、みんなで「よいしょ」と声を出しそうになる。積み上げて業務用のゴムバンドでくくった大小の荷物がごとごと音を立てて揺れるので、そのたびにそっと手を添える。リヤカーを引き引き、お喋りしながら通りを進むこの一団。引っ越しにしてはのんびりすぎ、フリーマーケットへ向かうにしては気合が入りすぎている。果たして、目指す場所は幼稚園。私たちは、谷中にある初音幼稚園へと向かう。

不思議な若者たちが幼稚園にリヤカーで乗りつけ、こどもたちと一緒に何かをつくったり遊んだりしている風景——三年目になるこども造形教室〈ぐるぐるミックス〉は、谷中の人々にとってはもう見慣れたものだろう。たくさんの工作道具を一つのリヤカーに載せて運ぶスタイルは〈ミックス〉のシンボルでもある。

今回参加させてもらう〈ミックス〉のタイトルは「おしゃれランウェイ」。簡単にいえば、

みんなでおしゃれしてランウェイを歩こう、というものだそうだ。何だかカッコいいぞ、と思いながらも一体どうやって実現するのだろうと疑問を抱く。

用意してきた荷を解いていると、こどもたちがちらほらやってきた。

「おーにし！　今日はなにするのー？」

ファシリテーターを務めるおーにしさんの周りにこどもたちが集まる。

「今日はね、ストールを巻いて、コウコさんと一緒にモデルになるんだよ。みんな」

「え〜！」「コーコさんってだれー？」

コウコさんというのは今回のゲストである。〈ミックス〉にはまちの大人がゲストで招かれ、そのゲストに合わせたプログラムをおーにしさんが考えている。お巡りさんがゲストの回ではアルミホイルでまちを守る道具をつくって身につけてパトロールに出かけたり、昆虫博士を呼んだ時には、昆虫を触ったり動きを真似してみたりするようだ。幼稚園の中に、外から人を呼ぶことや、まちに繰り出しゲストの人のお店をたずねたりすることは、信頼関係のなせる業であり、その関係は言わずもがな《ぐるヤミ》がこの地で築いてきたものなのだ。

遊びを通じて、まちの大人と出会う。まちの大人を通じてまちのことを知る。そうやってまちの大人とこどもが〝顔でつながる場所〟をつくること自体、〈ミックス〉の大きな目的となっているのだ。こどもたち自身が「あの交番のおじさん、僕話したことあるよ」と人に自慢できるような関係というのは、さりげないことだが魅力的だ。

元バリコレモデルだったコウコさんを迎え、今日の〈ミックス〉がスタートした。

まずコウコさんは、用意された台の上で次々ポーズを取ったり、身に着けているスカーフをするりとなびかせたりしてみせた。とても自然な、しかし存在感のある身のこなしに目を奪われる。台だって特別なものではないのに、そのときばかりは立派な舞台だ。こういう大人たちが同じまちで生活している、と思うだけで、何だかわくわくしてくる。

「みんなもカッコいいストールをつくって、コウコさんみたいにカッコいいポーズをとろう！」

おーにしさんの合図とともに、こどもたちは渡された無地のストールに野菜スタンプを押し始める。こどもたちが来る前に、スタッフ総出で野菜切りをして用意したものだ。気に入った形のものを選んで、恐る恐る布に載せる子。とにかく全種類を試さないと気が済まない子。また、小さなオクラスタンプが気に入って、広い布一面に一心不乱に押す子もいる。

スタンプしたインクが乾くまでの時間、コウコさんにポーズの指導を受けるこどもたち。コウコさんがベースとなるポーズを何種類か見せたあと、一人ひとりポーズを練習してみる。追っつけで乾いたストールも身に纏い、今度はどうやったら自分の好きな感じをつくれるか試行錯誤。

スタッフはこどもたちと話しながら、こういうポーズはどう？とか、こうやって結ぶときれいに見えるよ、とか言いながら一緒にあれこれ試す。一人でじっとしている子にアイディアを振ってみると、首を捻りながら「違う、本当はこういう感じのがやりたいんだよ……」と少し

ずつ意見を出してくるのだった。

ポーズとストールのスタイルが決まったらいよいよ撮影タイムだ。ストールが一枚あるだけで、いつもと違う装いに恥ずかしがるこどもたち。みんなより一段高いところで一眼レフのカメラを向けられ、ちょっと緊張の面持ちだ。コウコさんがすかさず「あなたカッコよくなったわよ！」と声をかけ、みんなは自分の「ランウェイ」を演じる。

この場面を見て、ふと〝《ぐるヤミ》っぽさ〟を強く感じた。華やかな服じゃなくても、スポットライトがなくても、いつもとちょっと違う空気感をつくるだけで、そこはもうファッションショー会場――そういう〝《ぐるヤミ》式妄想〟をこどもたちにも提示していることに、不思議な感動を覚えた。いや、あるいは、大人より彼らの本領なのかもしれないけれど。

〈ミックス〉の場では、目安としての造形モデルは提示するけれど、逆に「これをつくろう」という目標を設定していないという。というのも、ファシリテーターが素材の特性だけを紹介したら、あとはこどもたちの好きなものをつくるに任せるのだそうだ。紙や発泡スチロール、布など素材をよく見て、どんなことができるのか、どんなふうに遊べるかとこどもたち自身に考えてもらうのは、確かに《ぐるヤミ》の考えと合致している。

「言われたこと、教わったことをやらなくても、気持ち良いポーズがキマればＯＫなんだよ」

今回のテーマが「かっこいいポーズ」だとすれば、ポーズを取っているうちにストールなしでもカッコよく立てたら目標達成だし、自分ではポーズが取れなくても、コウコさんや友達のポーズを見て楽しむことだって方法の一つである。

おーにしさんの見てきたこどものなかには、反対に例示されたもの以外つくれない子、または自分の想像に技術が追いつかなくてショックを受けてしまう子もいるという。しかし、それでもよいのだ。こどもの独創性を育むことも大事だが、それと同じくらい悩むことが大切だ。そして、その手助けとして、大人の介入も意味のあることだと位置づける。

〈ミックス〉のスタッフは、全体をまとめるファシリテーターと、各テーブルに一人ずつつくサポートスタッフとで成り立っている。教室は通年で約三十人のこどもを受け入れているが、だいたい四人から五人で一班、そこに一人は必ず大人がついて一緒に工作をしてくれるのだから、こどもにとっても贅沢だろう。そんなスタッフが、手の止まったこどもの横でこまめに声をかけ、一緒につくる。ここのやりとりがとても重要なのだ。

スタッフはアートの専門家ばかりでない方が魅力的なんだ、とおーにしさんは言う。

「答えを例示するよりも、大人と一緒にどうしようか考えることがこどもには大切」

大人が自分の工作で一緒に悩んでくれるというのは、羨ましい関係だと思う。これこそ〝《ぐるヤミ》っぽさ〟のもう一つの正体だ。あーだこーだとやっていくうちに生まれる〝空気感〟は、もしかするとこどもの成長にすごい影響を与える……かもしれない。

それゆえ、事前の準備は非常に綿密に行われ、スタッフそれぞれが頭を悩ませる。こどもと

一括りに言っても、幅はものすごくあるのだ。つくるものはぱぱっと仕上げてしまい、あとは走り回っている子。緻密な作業を黙々とやり込む子。素材を交換したり、自分の作品を見せに出歩く子。他の子からいろいろ聞いて情報収集する子……そこにはいろんなこどもたちが共存している。一通りの伝え方をしても一人ひとりに伝わることは違うし、それ以前に聞いてくれない子や楽しみ方が分からない子もいる。こども一人ひとりの顔を見て、どう楽しんでいるかにフォーカスを当てることが、何より〈ミックス〉の肝なのだ。

この子の性格だったら何をしたら一緒にやってくれるか。あの子ならここに興味をもってくれるはずだ……。話し合いのなかで名前が出たとき、その子の顔が出てくるような関係づくりを、工作を通して彼らは行っている。一方で、そうやってスタッフが頭を悩ませ、こどもの手のサイズに言葉や行為を加工していく手間が、こどもたちにとっての原動力にもなるし、ひいては〈ミックス〉全体の力になっていくというわけである。

当然だけれど、こどもだって立派な一人のひとであり、彼らと人間関係を築くという作業は決して楽ではない。そして何より、こどもに何かを教えるというのは責任重大なことでもある。だからこそ、スタッフの悩む数だけ、こどもの発見も豊かになっていくのではないだろうか。〈ミックス〉は、もともとはきむらとしろうじんじんさんの発案・主導のような形で始まったが、今は自称弟子のおーにしさんが全体をつくっている。〈ミックス〉自体も徐々におーにしさんの色が強くなってきて、日々新しい〈ミックス〉が育っていると言えよう。

実際、みんなの前であれこれやっているところ――本人曰く〝パフォーマンス〟を、こどもたちに見てもらいたいとおーにしさんは言う。

「僕の言動を見て触発されて、創作意欲に火がつけばいいな。そのあとは、材料の準備をしてあげるだけでいいんだ」

おーにしさんがポーズを取る。おーにしさんが野菜の形を観察する。バレエや舞踏を思わせる立ち回りの彼を見て面白がるこどもたちのなかに、〈ミックス〉流の創作意欲を託しているそうだ。それはおーにしさんだからこその発想であり、それを見て一緒に面白がれるたくさんのスタッフがいてこそ成り立っているのだろう。

撮影の終わったこどもたちは、高揚からか一層はしゃいで跳び回る。前回つくった手作りの器に一つずつ大福を載せてもらい、きゃあきゃあ言いながら頬張る。

「おーにし！　次はなにするのー？」

こどもたちの目は、おーにしさんの一挙手一投足に注がれ、次回予告を騒がしく待つ。

鉛筆で描くぬか漬け

一月二九日（火）晴れ
〜上野桜木・木はっちにて〜

《ぐるヤミ》には〈アートよろず相談〉というプロジェクトがある。アートプロジェクトをはじめ、表現活動を始めたい人を対象とした相談窓口なのだが、要は〈はっち〉のリメイク版だ。

当時、《おかって》の人々のもとには年中無休で人が訪れ、相談というかお喋りというか、とにかくいろんな話をしたという。その流れを汲んで〝訪問者〟用に設えられたのがこの看板だったわけだが、気まぐれで寄ったり人生相談をしに来る人も、当時と変わらず訪れるそうだ。

気になるのは「アート」「よろず」という言葉。漠然と〈はっち〉と呼ぶより方向性がはっきりしているわけだが、「アート」と言いつつ「よろず」のことも相談してくださいというのは、要は「何でもいいですよ、いらっしゃい」ということなのではないだろうか。この名前を見たとき、《ぐるヤミ》全体に漂う〝開かれた内輪感〟（ちょりさん曰く）というものが、ふと実感を帯びて私のなかへ入ってきた。

〈よろず〉に限らず、誰かに相談する人の多くは、相手に答えを求めていないという。話を聞いてもらい、そして「自分で決めていいよ」と言ってもらうことこそが、悩む人の心の活力となるのだ。ちょりさんは言う。

「個人的なことをしていい。個人的な時間をもっていい。好きなことをしていい。それはもはや、人権レベルの根本的なことのはずなのに、社会はそれを公言してくれない」

やりたいことを自分で選んで決めることのできる人を世間は〝アーティスト〟と呼ぶが、だからといって、できなければ〝アート〟をしてはいけないということにはならない。相談に来る多くの人々は、やりたいことや、その種になり得るものをもっているにも拘らず、それを表に出すことを躊躇している。

〝アート〟と〝よろず〟――つまり日常のたくさんの物事は、決して乖離した存在ではない。むしろ、それをバラバラに見ているのは私たちの方なのではないか。そのせいで、私たちは表現することに対する一歩をとてつもなく大きなものとして感じてしまっている。

散歩をするみたいに、踊ってみる。映画を観るみたいに、言葉を紡ぐ。呼吸をするみたいに人と出会って、夢を見るみたいに妄想を膨らませる。全て自由なのだ。難しくなんかないのだ。

「だから、やってもいいんだよ」という後押しは、そんな一歩をぐんと縮めてくれる。

〝アート〟という言葉が指すのは、絵画、音楽、彫刻……そのように額に飾られ、名前や範囲

のはっきりとしたものだけである――そういった認識を多くの人が実際にもっているし、私もそうだった。

「今までステーキだけが〝アート〟だったけど、でもみんな、毎日ステーキを食べたいって思うかな。毎日食べられる〝アート〟があってもいいんじゃないのかな」

そんな考えがちょりさんのなかにはずっとあった。彼女が目指すのは《ぐるヤミ》という名前の文化、あるいは習慣をつくることだ。そこまでいってしまえば、もう日常である。

だから《ぐるヤミ》の活動を見た人は、これが〝アート〟なのかどうか、ちょっと分からなくなる。それほどまでに、あまりに日常的に見えてしまうもので何かをつくろうとしているのも確かだ。しかし、本当に何も起きていなければ、こんなに惹かれない。

「油彩ですごい絵を描く人はたくさんいる。そもそも油彩はそれだけですごそうな気配をもっているけれど、そうじゃなくて、鉛筆ですごい絵を描くような人に憧れるんだよね。『油彩だから』じゃなくて『鉛筆なのに』がいい。踊るにしても、路地とか何もない部屋の片隅ですぐに踊れるような人になりたいんだよ。そうすることで、どんな人にも何か可能性を感じてもらえるんじゃないかと思ってる。最初から都合のいいものを集めるんじゃなくて、磨けば光るものを拾って、自分で磨いてみたいっていう欲があるのかもしれないね。それは人に対しても同じ」

飾り立てた舞台でなくても人の心は動かせる。手に武器がなくても戦える。非日常が欲しいのではなく、日常のなかで非日常的なことを自ら起こしたい。今この場で与えられたもの、見つけたもので〝あそび〟を発明するというのが《ぐるヤミ》の得意技であり、アイデンティティだ。

「まあ、やってることと言えば〝ぬか漬け〟なんだよね」

彼女が言うには、食べない日も混ぜる手間が《ぐるヤミ》らしいから、ということだった。もっと簡単で豪華で味のはっきりしている食べ物もたくさんあるなかで、敢えて毎日面倒なことをしながら大事につくるぬか漬けは、じわじわと《ぐるヤミ》の印象に重なっていく。

「やりたいことをやってもいいよ」と背中を押されても、肝心の一歩をどう踏み出していいのかは、人からなかなか教えてもらえない。というより、教わってできるものではない。それを「じゃあ、一緒にやってみよう」と誘いかけるのが《ぐるヤミ》だ。とにかく同じ時間を過ごして、よくワカラナイものに巻き込まれて、ぬか床のにおいが染みつく頃には、きっとその人のなかで〝何か〟がふつふつと、静かに生まれてきているはずである。

鉛筆で一生懸命何か描いていると思ったら、ぬか漬けの絵だった。しかもそれが妙に美味しそう――その光景を、すごく見てみたいと思う。時間も愛情もたっぷり注いで、一筆ずつ丁寧に線を重ねていくちょりさんたち。その姿に「私も描けるかしら……」と筆を執る人たちが、少しずつ、しかし確実に増えていくことを、楽しみにしている。

おわりに

当初、《ぐるヤミ》の観察は困難を極めた。理由はもちろん〝ワカラナイ〟からだ。

ちょりさんは出会い頭に《ぐるヤミ》を「何だかワカラナイもの」と言った。そして「ワカラナイのがいい」と付け足す。モチベーションも活動内容も、生み出されるものも〝ワカラナイ〟。そもそも〝ワカラナイ〟って何なのだ。

分かることがよいことで〝ワカラナイ〟のはいけないことだ。小学校で机に向かって以来、私はずっとそんなふうに信じていた気がする。だから《ぐるヤミ》の観察をしていて〝ワカラナイ〟ものに出会うたび、頭を抱えた。とんでもないものに巻き込まれたぞ、というのが率直な気持ちだった。

目の前に卵があったとする。図鑑で調べたり専門家に聞いてしまえば、何の卵かというのはすぐに分かるだろう。でも、それを眺めて何が産まれてくるのかじっくり考えるという方法もあることを、私はここで知った。怪獣が産まれてくるかもしれない。いや、花が咲くかもしれない。そうやって、〝ワカラナイ〟ものに答えを求めない、だったらもっと大きな〝妄想〟で

卵を包んでみよう、とわくわくするのが彼らだった。

最初は無理やり分かろうとして躍起にもなったが、人々はそんなことお構いなしに、私の目の前で〝日常〟に胸を躍らせていた。だんだんと《ぐるヤミ》のイベントに参加する機会が増え、そこで知り合う人たちと話をすることも多くなった。表現活動をしている人も、ここの雰囲気が好きで通う人も、みんな私に何かしらの刺激をくれた。普段出会わないような人たちだからこそ余計に、自分の価値観の狭さを思い知らされもした。といって眉間にシワを寄せていると、まあのんびりやりなよ、と肩を叩かれる日々だ。

ちょりさん自身の思い描く世界に触れてきて強く思うのが、楽しむというのは本当はとても大事なんだということだ。〝ワカラナイ〟ものや、のんびりとした時間、無駄なことに触れるのが怖い人は、私だけではないはず。これらはまた、思っているよりずっと脆い存在で、ない方が確かに安心で簡単だ。でも、卵のなかには黄身と白身が詰まっていることを知るより、卵の声に耳を澄ませ、掌でじっと温め続けた方が、生まれてきたヒナを愛することができると思うのだ。そうやって、私たち一人ひとりの卵を――〝予感〟の状態で孵化せずにいるたくさんの可能性を、集めて人の掌に載せることができるのが《ぐるヤミ》なのではないか。

ひとまず観察を終えて思うことは、やはり《ぐるヤミ》って何なのだろう、という謎。かなり時間をかけて考えてきたつもりだけれど、それでも〝ワカラナイ〟ものは〝ワカラナイ〟のだ。

というより、そこを暴いてしまえば、たちどころに《ぐるヤミ》は消滅してしまう。

だから、結局は最後まで、観察は困難を極めた。しかし、私のなかにも微かに脈打つ小さな卵があるらしく、「〝ワカラナイ〟のも楽しいものだ」という囁きが確かに聞こえる。そんなわけで、私が人に「《ぐるヤミ》って何？」と聞かれたら、こう答えようと思う。

「何だか〝ワカラナイ〟たくさんの〝予感〟が孵化するための〝あそび〟を〝発明〟する〝文化〟」

分かるようで何だか全然〝ワカラナイ〟言葉をつくってみた。いかがだろうか。

中島裕美（なかじま・ゆみ）　ライター・物語紡ぎ。二〇一二年より《ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト》の観察者として活動に参加。趣味は妄想と野宿。ＡＢ型。